

保育を支える園内研の在り方

○佐々木 麻美 上坂元 絵里 杉浦 真紀子

渡辺 満美 田中 かさね 栗原 妙佳 (お茶の水女子大学附属幼稚園)

I はじめに

本園の園内研では、事例を元に保育者で話し合う「保育カンファレンス」^{※1}を実施している。園内研は、週1回、2時間程度を基本に、担任、フリー、養護教諭、副園長が集い行っている。

筆頭者の佐々木(以下S保育者)は昨年度から園内研に参加し始めた。その園内研において、子どもの捉え方が多面的に膨らんでいくような話し合いに面白さを感じた。このような園内研において、保育者は何を大事に考え、話し合っているのだろうか。園内研の記録や保育者の意識を手がかりに、園内研の在り方を探ってきたい。

II 記録(平成28年7月記録)を手がかりに

S保育者は園内研の在り方を探りたいと考え、話し合いをPCで記録することにした。S保育者は園内研に参加する中で、自分が当たり前だと考えていたことがそうでもないと感じ、子どもを巡って話し合うことの面白さを感じている。ここでは、3歳担任が事例を出した日の記録を取り上げる。

6月誕生会。保育者による劇が終わると泣き出した3歳A児。劇が怖かったのか泣き続け、おやつも食べられなかった。7月誕生会、途中で泣き出したものの、保育者の膝の上で参加し、少し落ち着く。今回はおやつを「おいしいね」と担任に何度も伝えながら食べた。

<S保育者の気付きは、斜体太字で記載する>

(担任保育者) 誕生会は、毎月同じことを繰り返し、回を重ねることで嬉しさの感覚が、子ども達の中に積み重なっていると感じる。

(保育者A) 4、5月のA児の誕生会での様子はどうだった?

(担任保育者) 自然と皆の中で座っていた。

(保育者B) 誕生会は、先生との距離感が変わる。部屋で遊んでいる時の先生のまなざしと違う。

<意識していなかった!遊んでいる時とは違う>

(保育者C) 誕生会に行くのが嫌という子がいる。

<子どもの思いを違う角度から捉えられるのかもしれない>

(保育者D) 場が変わるといのは大きい。(それに) 保育者の意識が同じ幼稚園の中で、意識の向け方がとても変わるときだと思う。

<確かに全体にまず意識が向いているのかもしれない>

(保育者E) (子どもにとって誕生会は) リズムが変わらない時間が多いね。

<子どもは受け身になることが多くなるのかな>

(保育者G) (そうした非日常な誕生会を) 私たちは切り取ってつなげて考えられるけれど、子どもにとっては毎日を過ごしているうちにふとやってくるものなのかもしれない。

<子どもから考えると、積み重ねる意味が変わってくる>

担任の話す子どもの様子について、他の保育者が思い思いに話していく。その中でここでは、子どもの内側に身を置くともいような保育者の視点が見いだされた。

このように、園内研では、経験や立場の違う保育者が集い、様々な視点で話し合いが行われる。たくさん話す、聞きながら考える、いろいろな姿が認められ、話し合いが「語り合い」になっていく。

III 保育者の意識を探る

なぜこのような園内研が行われ、いろいろな視点が出てくるのだろうか。また、担任の意識や周りの保育者の意識に変化はあるのだろうか。保育者の意識を探りたいと考え、園内研メンバーの一人が参加者にインタビューを行うことにした。

インタビューは、「事例を出すときに考えること」「自分にとっての園内研とは」の2項目とした。

事例を出すときに考えること

- ・事例をどう書き、園内研に出してどう話そうか、戸惑ったり、緊張したりする。それは、子どもと関わる時に揺れていることや自分の子どもの捉えや見取りが突きつけられるからかもしれない。
- ・書きたくなったり、話したくなったりした出来事を事例にする。他の保育者に伝えたい子どもの変化や話さずにはいられない面白い(つらい、よくわからないも含む)出来事があった時に、みんなと語り合いたいと思う。

自分にとっての園内研とは

- ・話し合いの中心は子どものことである。子どもがその時どんな思いだったのか、どうしてこういう姿だったのか、また、保育者のこの関わりは子どもにとってどうだったのだろうか…等、人の話を聞いているうちに気持ちが動いて話したくなったり、もっと子どもや保育者の思いを知りたくなる。
- ・質問されたことで、自分がこう考えていたのだと気づいたり、自分は子どもが見えていなかったと関わりを反省し、落ち込むこともある。
- ・他の保育者の思いを聞くことはとても面白い。自分は話すことがなかなかできないこともあるが(率直に話せるようになりたいとは思っている)、その場において聞いていることでわかることがたくさんある。

園内研のインタビューを通して、

- ・話し合いの中心は子どものこと
- ・事例を出すことに対して緊張感がある
- ・他の保育者の思いを聞くことができる
- ・自分の保育を振り返ることができる

等、一人ひとりの保育者が感じていることがわかった。

さらに、子どもの姿から保育を振り返る語り合いの中で、他の保育者の関わりを自分ごととして捉えていることが見えてきた。園内研に、自分らしく考えられる余白のようなものがあることで、自ら学んでいこうとする意識がうまれるのではないだろうか。

IV まとめ

それぞれの保育者が自分はこれでいいのかと思いながら園内研に参加する。園内研に出てみると、思いや関わり方は違ってもいい、と感じ、安心する。そのことで保育に安心感が広がり、子どもの捉え方や保育者の動きが重層的になり、保育の奥行きや深さを感じられるようになる。

園内研が、子どもの姿から語り合うことを中心にして、子どもと向き合う保育者の悩みや葛藤を出しあえる場になっていくことが、次の保育への原動力となる。

※1 お茶の水女子大学附属幼稚園 幼児教育研究会(1996-2002)

『保育の研究』第1巻～第6巻